国　　語

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

令和３年度大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は，平成25年度入学生から実施された高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）を踏まえた試験であった。指導要領では，総合的な言語能力を育成する「国語総合」を共通必履修科目とし，高等学校「国語」において指導する内容の共通性を重視している。

共通テストでは，指導要領において育成を目指す資質・能力を踏まえ，知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっており，言語を手掛かりとしながら，文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり，目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求めることとなっている。

高等学校「国語」教科担当としての立場から，本年度の試験問題を検討した。検討を加える観点として次の点を設定した。

・　問題内容は適切であったか。
・　知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題の出題も含め，バランスのとれた問題であったか。
・　指導要領に定める範囲内での出題であったか。
・　出題内容に極端な偏りはなく適切であったか。
・　試験時間に照らして適切な分量であったか。
・　設問数・文字数などは適切な量であったか。
・　問題の難易度は適切であったか。
・　学習の過程を意識した問題の場面設定がなされた問題が含まれており，教科・科目の本質に照らし適切であったか。
・　設問形式や配点は適切であったか。
・　文章表現・用語は適正であったか。

以上の観点に立ち，「内容・範囲」「分量・程度」「表現・形式」の面から，第１問～第４問それぞれに検討を加えて，評価し意見を述べる。

２　内　容・範　囲

第１問　椅子を題材として「もの」と「身体」の社会的関係について論じた文章である。具体例を用いながら，椅子のデザインの変容についての歴史的背景を説明するとともに，社会的・文化的な「身体」という概念を説明しており，抽象的な概念について的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。

問１　漢字・熟語についての基本的な知識・技能を問うている。

問２　$\boxed{1}$段落で書かれている生理学的な二つの問題を整理して本文の論理構造を把握する力，またその上で$\boxed{4}$・$\boxed{5}$段落に書かれている内容を的確に読み取る力を問うている。

問３　傍線部直後にある，衣装が社会的な記号であるという概念と，それに伴う椅子のデザインがもつ意味という抽象的な考え方について的確に読み取る力を問うている。

問４　人間の「身体」が政治過程を含んでいるとはどういうことかという抽象度の高い内容について，本文全体の文脈を正確にとらえ，［８］段落の内容を的確に読み取る力を問うている。

問５　本文におけるそれぞれの段落の役割や内容を適切にとらえ，本文全体の論理構成を的確に理解する力を問うている。

問６　「もの」と「身体」との社会的関係について身近な具体例に即して考え，本文の要旨を的確に読み取る力を問うている。

第２問　「サキの文庫本」と「女の人」との出会いから，他者や物事に自ら働きかけることのなかったこれまでの自分について考え始める「千春」の心情を描いた文章である。「千春」の内面の描写が丁寧であり，心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。

問１　本文の読解に必要な語句の意味についての基本的な知識・技能を問うている。

問２　39行目までに描かれている「千春」の言動の描写を根拠とし，「何も言い返せないでいる」彼女の心情を的確に読み取る力を問うている。

問３　57行目から59行目までに描かれている「千春」の心情を，本文全体の文脈と照らし合わせて的確に読み取る力を問うている。

問４　74行目から80行目までの文脈を正しくとらえ，「千春」が読書についてどのように思ったかということについて的確に読み取る力を問うている。

問５　本文の最後の場面で「女の人」がくれた「ブンタン」が，「千春」の気持ちや行動とどのように関係するのかを，本文の内容を根拠として適切に考察する力を問うている。

問６　「千春」の心情が変化する契機となった「女の人」について，本文の特徴的な表現を根拠として的確に読み取る力を問うている。また「女の人」の描写や役割に注目し，他者との対話を通じて本文の理解を深める力を問うている。

第３問　『源氏物語』の続編とされる『山路の露』からの出題。出家した女君を訪ねる男君が，我慢ならず女君の前に姿を現してしまう場面である。古文特有の語句も多く用いられ，さらに和歌も数首含まれており，古文を的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。

問１　本文の読解に必要な基本的な単語や文法の知識を問うている。

問２　傍線部の語句や表現に関する細部を分析し，男の心境を踏まえて内容を的確に読み取る力を問うている。

問３　本文で描かれている男君の行動や心境について，本文全体を的確に読み取り，総合的に理解する力を問うている。

問４　男君に見つかってしまった女君の心境について描かれている23行目以降の内容を，順を追って的確に読み取る力を問うている。

問５　本文中でたびたび描写されている「月」について，この月の光が本文の展開においてどのような効果をもたらすのかということを的確に読み取る力を問うている。

第４問　『墨池記』の一節からの出題。「臨池学書」ということばの由来となった張芝，王羲之に関する内容について書かれたものである。基本的な知識や句法をもとにして漢文を的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。

問１　本文の読解に必要な基本的な句法や漢字の読みについての知識を活用して，文脈を適切に解釈する力を問うている。

問２　本文の読解に必要な再読文字の知識をもとに，文脈を的確に読み取る力を問うている。

問３　本文の読解に必要な比較形や疑問形の句法の知識をもとに，文脈を的確に読み取る力を問うている。

問４　本文の読解に必要な抑揚形の句法の知識をもとに，文脈を的確に読み取る力を問うている。

問５　直前に書かれている「恐其不章也，…」の文脈を正しくとらえ，「王君之心」が何を指しているのかを的確に読み取る力を問うている。

問６　訓読についての基本的な知識や使役形の句法についての知識を活用して，適切に書き下し文になおし，文脈を的確に読み取る力を問うている。

問７　本文に出てくる「墨池」が何を表しているのかということについて，【資料】から必要な情報を読み取り，本文全体を総合的に読み取る力を問うている。

３　分　量・程　度

⑴　設問数について

制限時間80分に対して大問は４問で，大問ごとの設問数は第１問と第２問で各６問ずつ，第３問で５問，第４問で７問であった。全体の解答数は37で，共通テスト⑴より１問少ないが適切であった。

（共通テスト⑴：大問ごとの設問数は第１問と第３問で各５問ずつ，第２問と第４問で各６問ずつ。全体の解答数は38。）

（昨年度のセンター試験：大問ごとの設問数は各６問ずつ。全体の解答数は35。）

（昨年度のセンター試験追試：大問ごとの設問数は各６問ずつ。全体の解答数は35。）

⑵　難易度について

第１問は，本文及び設問中の資料とも，高等学校の授業で扱う文章レベルとして妥当であった。設問は，指導要領や授業において生徒が学習する場面を意識しており，難易度としては適切であった。

第２問は，本文の場面設定が現代のものであり，読みやすく基本的な読解力を判定する上で適切であった。問６のように，授業における言語活動の過程を重視した設問も適切であった。

第３問は，本文が『源氏物語』の続編とされる『山路の露』であり，題材，文章量とも適切であった。基本単語や文法の知識を活用して解答する設問や，「月」に注目して読み解く設問が出題され，難易度としては適切であった。

第４問は，曾鞏の『墨池記』を題材としており，文章量は適切であった。問７は本文に関連する資料を読んで解答する設問であったが，資料の分量も適切であった。

全体的に，難易度は適切であった。

４　表　現・形　式

第１問

〔問６〕本文で述べられている「もの」と「身体」との社会的関係について理解した上で，具体例にあてはめて考える授業場面が設定されており，このことは問題作成方針に合致している。表現や用語も受験者の混乱を招くものはなく，適正であった。また，配点については設問の内容に見合った配点がなされていた。

第２問

〔問６〕本文の登場人物の言動や描かれ方に注目して人物像をまとめ，小説の読みを深めていくという学習場面が設定されており，問題作成方針に合致している。特に⑵では「千春にとって女の人はどういう存在として描かれているか」という表現を用いて，登場人物が他の人物に与える影響を考えさせる工夫が見られた。また，配点については設問の内容に見合ったものであった。

第３問

〔問４〕「女君」の心境についての説明として適当なものを二つ選ぶ形式の問題である。問３が「男君」の行動や心境について問う問題となっており，形式として似通っている。また，配点が一つ７点，二つで14点の設定となっている。問３と問うている内容は異なるものの，問題の形式の工夫や配点の設定の妥当性について，今後検討していただきたい。

〔問５〕本文中の「月」の描写に注意して，場面上の効果について考えさせる形式の問題で，授業で生徒が学習する場面を意識しており，問題作成方針に合致している。

リード文における「この文章では，『月』がたびたび描かれ，登場人物を照らし，和歌にも詠まれている」という表現によって受験者の注意を「月」に向けさせるとともに，人物との関係を意識させる配慮が見られた。配点についても設問の内容に見合った配点がなされていた。

第４問

〔問７〕本文と同じ「墨池」の故事を話題にした資料と本文とを比較して，それぞれの内容を評価させる形式の問題となっている。資料の内容を踏まえて本文の理解を深める授業場面を想定した問題であり，問題作成方針に合致している。表現や用語も受験者の混乱を招くものはなく，適正であった。また，配点については設問の内容に見合ったものであった。

第４問は，漢文の句形や語法の理解を直接的に測る形式の問いが比較的多く設けられていた。句形や語法の知識が重要であることは言うまでもないが，こうした知識をもとに，読み取ったことを生かして本文の理解を深めていく学習過程を意図した設問の可能性について，今後検討していただきたい。

５　ま　と　め

従前実施のセンター試験「国語」において出題されてきた良問の蓄積を基盤とし，知識の理解の質を問う問題や，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視するとの共通テスト問題作成方針に則した良問が出題されたことを評価する。今後，高等学校での学習を通して受験者が身に付けた力を評価するのに妥当な問題として作成され，また，生徒の言語能力を育成する高等学校国語科の授業づくりに資することを期待して，意見・要望を以下に示す。

⑴　「国語総合」の枠の中で指導要領に沿った作問がなされていた。第１問における本文の趣旨を踏まえて具体例を考察する設問，第２問の人物像，人物設定を考察する設問など，学習者による「主体的・対話的で深い学び」を踏まえ，工夫された形式で出題されており評価される。

⑵　いずれの大問も，本文が比較的平易で適量であり，時間内でテクストの細部を検討したり全体の要旨を把握したりして読み，設問の意図を捉えて選択肢を吟味することが可能であったと思われる。しかしながら，選択肢に使用される語句等に関する受験者の知識が不足しているためであろうか，問題そのものの難易度が適切であっても得点が出にくいという状況が見られる。設問の作成に際しては，問題そのものの難易度はもちろん設問及び選択肢に使用する語句，表現についての吟味を要するとともに，国語科の授業においては，基本的な語彙や表現についての確実な習得を促す指導の工夫が求められている。

⑶　共通テストにおいては，生徒が「どのように学ぶか」を重視していることが感じられるものであった。本文の主題に迫る学習課題，その解決を図る目的で設定された「対話的な学び」の視点，同一の故事に関する二つの文章の提示にみられる教材の工夫など，授業改善の視点から大いに示唆に富むものであった。このような出題が国語科における授業改善を促し，生徒の言語能力の育成に資するよう今後とも工夫を凝らした出題がなされることを期待する。

第２　教育研究団体の意見・評価

○　日本国語教育学会

（代表者　桑原　隆　　会員数　約3,000人）
ＴＥＬ　03-6801-5951

１　前　　文

⑴　現代文分野

評論は，共通テスト⑴と比べ読みにくい。順序立てて説明してあり，難解すぎるというわけではないが，情報量が多く，抽象度も高い。制限時間内で急いで読もうとすると，とりこぼしてしまう恐れがある。小説は読みやすく，リード文や注の工夫も良かったが，共通テスト⑴との年代の差が大きい。共通テスト⑴と共通テスト⑵では，新傾向問題のかたちが異なり，どのようなすみわけを考えて作られたのかが気になるところである。

⑵　古典分野

文章量は適切であるが，共通テスト⑴とのバランスに問題がある。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第１問　注を含めた情報量が多く，受験者にとっては読みづらい問題であった。

問１　㈦の選択肢「包含」「砲台」は日常的な語彙ではない。㈭「不慮の事故」のようなネガティブな言葉は，避けられるのであれば避けたほうがよい。

問２　傍線部Ａまでが遠く，また，問２にしては難しい。この前に導入としての問いを入れることはできなかったか（本文として，事実の確認をしている箇所なので作りにくいとは思う）。①だけクッションという言葉が入っていないのは目立つ。

問３　傍線部ＡとＢの間も長い。受験者は負担を感じてしまうのではないか。内容としては妥当。聞くべきところであり，キーワードを理解しているかどうかがわかる問題。

問４　文章の最後に傍線部があり，全体の総括として問うべきところ。やや難しいが，よくねられた選択肢になっている。問２～問４で解きながら理解していくような問題になるのが理想的だが，今回はそうなっていなかった。

問５　「構成と内容」についての問いのはずだが，内容に関する問いになってしまっている。共通テスト⑴のノートの問題に当たると思うが，あのようなかたちで構成を問うこともできたのではないか。

問６　学習の場面を想定している問題。具体的な例を挙げさせるのは授業にもつながる。しかし，設定にやや無理があり，それぞれの意見を出し合うだけで対話がないのであれば，通常の選択肢と同じである。対話の問題は高校入試，あるいは中学の適性試験などでも出てくる形式であり，中学・高校でのそういった学びを踏まえた問題にしてもいいのではないか。新学習指導要領の対話的コミュニケーションという目標につながる問題であり，教室とテストがつながっていく可能性を見ることができる問題であり，その方向性はよい。しかし，共通テスト⑴のノートの問題に比べ，中途半端であったと感じる。

第２問　読みやすく，受験者も状況を想像しやすかったと思われる。共通テスト⑴とのバランスに課題が残る。

問１　㈦「所在ない」など，選択肢の言葉が少し難しい。

問２　傍線部Ａの位置が後ろにありすぎる（傍線部Ｂにあえて近づけたのかもしれないが）。Ａよりも前に別の問いがあってもいいのでは。「状況や心情」を問うと，選択肢を短くまとめるのが大変なのではないか。

問３　問うべき問題。問２と異なり心情に絞っていて，よい問題になっている。傍線部ＡとＢが近く，読みを深めながら解くことができる。

問４　問うべきところ。「～ではない」という否定を問題にしているのが面白い。選択肢として，②だけ「牛の話」で始まっておらず，目立っている。

問５　授業であれば色々と解釈してもらうところ。これまでの問題と比べて，誤答の根拠が捉えにくい。正答は⑤だと思うが，⑤がなければ，④もそこまで悪い解答ではない。

問６　学習の場面を想定した問題。設定があり，会話となっており，第１問よりは実際の対話に近づいている。従来の「会話が選択肢になっている問題」と異なり，無理がない。Ｉ⑤の誤答は，そう解釈できなくもないのではないか。選択肢のねりこみを求めたい。

第３問　文章量は適切。ただ，文章が市販の問題集に掲載されていた。公平性を考えると，問題集（学校販売のものも含めて），数年の大学入試問題等をきちんと確認した上で出題していただきたい。共通テスト⑴と比べると易しい。共通テスト⑴とのバランスをお願いしたい。

問１　最初の問題として適切。聞き方も適切で良問。

問２　文法と読解をからめた問題。良問。

問３　内容読解の上では問うべき問い。難易度も適切。部分読解にとどまることなく文章全体を俯瞰していく問題。

問４　問うべき問いだが，②の選択肢を導き出すのは平易ではない。

問５　表現から読解を深める新傾向の問題。「月」を多角的に問うているのは良い。

第４問　文章量は適切。内容面では句形が重なり過ぎている。資料は共通テスト⑴と同じく最初の文章と並べて欲しかった。古文は傍線部がほとんどないが，漢文は傍線部が多く，難易度も含めて同じ古典でありながら，古文と漢文では方向性が違いすぎるのでもう少しバランスをとっていただきたい。

問１　㈦は送り仮名があってもよいのではないか。㈠「豈」は問うこと自体は適切だが，問３と重なっている。

問２　平易な問題。

問３　問１と重なるが「豈」が２回も出題している。選択肢の内容については，古文ではここまで漢文文法をストレートに出題していない。古文とのバランス，今後の方向性を含めて検討していただきたい。

問４　平易ではあるが妥当な問題。

問５　内容を読解していく上ではこの問題は必要。

問６　共通テスト⑴の問４と重なるが，白文を読む力を国語総合の必修科目に求めるのかどうかを検討していただきたい。

問７　工夫されている問題であり，選択肢も紛れはない。

第３　問題作成部会の見解

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　言語を手掛かりとしながら，文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり，目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章，文学的な文章，実用的な文章），古典（古文，漢文）といった題材を対象とし，言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては，大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく，異なる種類や分野の文章などを組み合わせた，複数の題材による問題を含めて検討する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問　多木浩二著『「もの」の詩学―家具，建築，都市のレトリック』（岩波現代文庫，2006年１月）の第１章より一部抜粋（約3700字）して出題した。近代前夜の西欧における椅子の形態が変容していくさまを観察・分析しながら，特権階級にのみ許されていた生理的快適さへの指向がブルジョワジーに吸収されていく過程が論じられ，人間の身体が文化の産物であり，政治や歴史を反映した表現であるという視点が提示される。身近な題材から抽象的な主題を導き出していく丁寧な論理展開が特長で，日常に埋没した自明の感覚や発想に対する再発見を促してくれる文章である。出題は，国語の特質に関する事項のうち，常用漢字の読み書きを文脈から判断する問い，読解に関わる問い，表現と構成・展開の説明の妥当性を問う問いから構成される。問１は漢字の読み書き，問２～４は本文の読解に関する問題，問５は文章の構成を問う問題とした。問６は本文を読んだ後に生徒が既有の知識に立ち返って再考した設定と，本文の主旨を踏まえて別の事例を具体的に設定して考察する応用力を問うた。問６は内容と難易度を判断して，適切でないものを問う形式にしたが，正答率などを見れば大きな混乱はなかったと判断できる。

第２問　津村記久子「サキの忘れ物」は，『文藝』第56巻第３号に発表された小説である。出典は『サキの忘れ物』（河出書房新社，2017年８月）。出題部分は作品中盤にあり，出題にあたって人物や場面の設定等，読解に必要な情報をリード文で補った。高校を中退し，病院併設の喫茶店でアルバイトをしている18歳の主人公・千春が，常連客である女の人が忘れた本をきっかけに彼女と交流することを通して，閉塞した状況を乗り越えていく過程が描かれる。全体を通して，主人公の心境の変化と成長や，主人公にとっての読書の意味を読み取ることが求められる。問１は，辞書的意味を押さえた上で文脈に即した語句の意味を問う問題。㈠㈦の正答率が高いが，これは出題の方式に起因する課題である。問２は，女の人との会話を続けられなくなった千春の状況や心情の説明を尋ねる問題である。問３は，女の人との出会いに触発され変化した千春の心情を読み取る問題。問４は，「サキの本」を読んだ後の，千春にとっての読書の意味を読み取る問題である。問２から問４の正答率はやや高かったが，問５の難度を踏まえて想定していた範囲内に収まっている。問５は，ブンタンの描写と千春の心情や行動との関係を尋ねており，傍線部と文章全体を関連させて読み取る必要がある。予想通り，正答率はやや下がった。問６は，登場人物の描写をもとに話し合った言語活動の場面を読み，課題に適切に対応した発言を選ぶことで，文章構成と内容を把握できているかを問うている。各問の正答率は概ね成績層に相関する結果となっており，登場人物の心情や視点を本文の表現に即して読み解く力を識別できる問題であったといえる。

第３問　『山路の露』は，『源氏物語』宇治十帖の続編として書かれた擬古物語である。作者・成

立年代は未詳。鎌倉時代（恐らく後期）の成立かと考えられる。出題範囲は物語中盤，男君（薫）が小君と共に小野に赴き，女君（浮舟）を垣間見する場面から，女君と再会し，歌を交わす場面であり，1200字弱の分量である。本文は適切な中古文で綴られており，場面も理解しやすいので，二人の再会の心情と贈答歌に焦点を当てて古文の読解力を問うのに適切であると判断される。問１は古文に特有の単語の意味と語法の解釈について正しく理解できているかを問う問題である。(ｱ)，(ｲ)二つの問いのうち，とくに(ｲ)については，複数の語義を持つ「はかなし」がきちんと文脈に即して識別できるかを確かめるなど，(ｱ)に比してやや難度を高く設定した。問２は文法・単語に関する知識を文脈理解のために活用できているかを問うたもので，解答結果からも，適切な問いであったと考えられる。問３，問４は本文に登場する主要人物の行動や心情について問うもので，受験者が設問を通して，より作品内容が理解できるよう，作成を心がけた。とくに問４では本文の後半で複雑に変化する女君の心境が丁寧に読み取れているかどうかを問うている。問５は，本文に頻繁に記される「月」および「月」をめぐる場面について問うもので，古文単語や表現効果など，多角的な視点から作品内容を理解できているかを問うた。本文行数を示して，特定の単語やそれにまつわる場面についての理解を問う，新しい試みであるが，受験者にとって，とくに大きな負担ともなっておらず，結果を見ても，適切な問題であったと言うことができる。

第４問　問題文は，北宋の文章家曾鞏が東晋の書家王羲之に関する故事を記した「墨池記」（『元豊類稿』巻十七）から取った。この文章は『唐宋八家文』に採られて古くから親しまれたものだが，先天的な才能よりも，後天的な努力を重視する曾鞏の考え方は，現代の学習者にも意義深いものと判断して出題した。さらに，「墨池記」を読み解く上で参考となる王羲之の言葉（『晋書』「王羲之伝」）を【資料】として提示し，読解が深まるように配慮した。「墨池記」の文字数は165字，【資料】の字数は22字で，計187字（句読点を除く）である。問いの数は９。問１は漢文の基本語を句の中で問う問題。単語の読み方・意味ではなく，句の解釈という形で問うた。問２は再読文字の理解を問う問題。文脈に即して適切なものを選べるかを問うた。問３は漢文の句法についての基礎的な理解を問う問題。文中の複数の句法を判断する力を問うた。二つ選ぶという出題形式にとまどったためか，得点率と正答率との間に隔たりがあった。問４は「況」の句法を押さえつつ，文脈理解を問う問題。問５は「王盛」の心情を軸として，文章の内容を問う問題である。問６は返り点の付け方と書き下し文との組合せを問う問題。長めの文を問うたが，正答率は適正であった。問７はこの文章全体の主張が理解できているか，【資料】を交えて掘り下げる問題。複数の資料にわたる問題であり，なおかつ合致しないものを選択するという出題形式であったが，適切な識別力を持つ問題であったと判断される。

３　出題に対する反響・意見等についての見解

第１問　情報量の多い文章であるため，共通テスト(1)の出題と比べて読みにくさは感じられるものの，抽象的な概念について的確に読み取る力を確認するうえで適切なもので，高等学校の授業で扱うレベルとして妥当な難易度だったと評価された。生徒の学習場面を想定した問６については，本文の趣旨を理解したうえで具体的な事例についての省察を促す形式が指導要領の方向性にも合致したものという評価を受けた一方で，場面設定が個々の意見を出し合う段階にとどまっているという指摘もあった。高等学校国語科における主体的・対話的で深い学びの実践につながるよう，今後もより良い設問を追求していきたい。

第２問　登場人物の内面の描写が丁寧であり，心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を読み取る力を確認する上で適切な問題文であったという評価を受けた。語句の本文中での意味を

問う問１については，選択肢の言葉がやや難しいという意見もあったが，本文の文脈がつかめているかどうかを識別する意図があった。登場人物の視点や心情を問う問題である問２から問５は，それぞれ適切という評価であった。問６については，学習場面の設定が問題作成方針に合致している，また，選択肢の形式や内容に無理がないという評価を得た。特に⑵での登場人物が他の人物に与える影響を考えさせる工夫が評価された。配点については設問の内容に見合ったものであった。第２問全体について，共通テスト⑴との問題文の時代的な隔たりが大きいという意見もあったが，総じて読みやすく基本的な読解力を判定する上で適切であったと考える。

第３問　古文特有の語句も多く用いられ，和歌も数首含む問題文ということで，文章量も含め，問題文として適切であるとの評価をいただいた。出題内容についても適切，良問との反響をいただいている。問１については，本文の読解に必要な単語や文法事項について問うた，最初の問題として適切，問２については，文法と読解を絡めた良問，問３については「部分読解にとどまることなく文章全体を俯瞰」していく，内容を理解するうえで「問うべき問い」であるとの，問４については登場人物の心境や内容を，「順を追って的確に読み取る力を問う」ものとの，問５については，「表現から読解を深める新傾向の問題」「『月』を多角的に問うているのは良い」との意見・評価をそれぞれいただいた。今後も現代の高校国語教育の実情を踏まえつつ，現場の指導目標になるべき問題作りを心がけていきたい。

第４問　問題文・設問ともにおおむね適正で，全体的に適切な難易度であったとの評価をいただいた。問７は，「墨池」の故事を話題にした【資料】を提示して本文の主張を掘り下げる問題であるが，【資料】の分量は適切であり，「資料の内容を踏まえて本文の理解を深める授業場面を想定した問題であり，問題作成方針に合致している」「工夫されている問題であり，選択肢も紛れはない」との肯定的な評価をいただいた。一方で，「漢文の句形や語法の理解を直接的に測る形式の問いが比較的多く設けられている」との指摘があった。知識・技能のみを問うことにはならないよう引き続き留意したい。問１・問３で「豈」に関する問いが重なることへの指摘もあったが，重要単語をただ暗記して事足れりとするのではなく，多義性をはらむ漢字を文脈に即して理解する力を問おうとしたものである。

４　ま　と　め

第１問　指導要領で多様な文章を生徒に読ませることが目指されていること，また，言語活動を重視し，思考力・判断力・表現力等に結びつく学習が目指されていることなどを配慮した設問を工夫していくことが求められる。とくに後者については，今後も高校での学習過程を踏まえつつ，どのような能力を測るのかということに注意を払いながら，問う内容と問い方を工夫していくことが必要である。

第２問　本題材は文体や現代的な内容から，受験者にとって読みやすく，状況を想像しやすかったであろうと評価された。設問に関しては主人公の心境の変化と成長の過程を丹念に読み取ることを出題意図とし，内容，難易度ともおおむね適切であったと考える。ただし，語句の意味を問う問題は，対象とする語句の選定の難しさと正答率の高さの両面から，より適切に学力を測れるようにするため，出題形式自体の再考が必要となる。これは今後の検討課題としたい。

第３問　高校における古文の学習成果を適切に評価できるような問題作成となったと考えている。問５については古文として初めての試みであったが，受験者の能力をきちんと確認でき，十分に目的を達成した。今後も入念に題材を吟味するとともに，各問の問い方やリード文，選択肢においても工夫をして，共通テストとしての新機軸を考慮しつつ，一方で奇抜に陥らないよう，

問題作成を心がけたい。

第４問　漢文問題は，問題文の分量と注及び設問の難易度を調整することで，受験者が取り組みやすいように努めたが，問１，問３，問７など，従来のセンター試験の出題形式そのままではない問題については，無答率が増加し，正答率がやや低下する傾向が見られた。今後は，古典としての漢文の基礎的な学力を測定するものでありつつ，難易度のバランスに留意した上で，指導要領に対応した新たな問い方を工夫してゆくことが求められよう。